伊藤美由紀（作曲家）

モーツァルト
歌劇『ドン・ジョヴァンニ』K.527 序曲

歌劇『ドン・ジョヴァンニ』は、プラハのエステート劇場からの委嘱作品であり、同劇場でモーツァルトの指揮により初演された。オペラ作曲家にとって、序曲は、作品完成後の最後の作品となることが多い。『ドン・ジョヴァンニ』の序曲は、プラハでの初演直前にモーツァルトが徹夜で悩んで書き上げた作品である。この序曲では、これから始まるドラマを予兆する音楽の断片が効果的に使用されており、彼の手腕が生かされた納得のいく作品となっている。彼は、演奏会用の序曲として、終結部を後ほど、新たに作曲している。

冒頭の緩やかな導入部は、不吉な雰囲気を漂わせる。フォルテで総奏によりニ短調の主和音から荘厳に響かせる。ティンパニのトレモロ、ヴァイオリンのシンコペーションのリズムが、その効果を更に引き立てる。次の属音による和音との間の休符が更に緊張感を高めて、出だしを引き締めている。この2和音により、オペラ全体を総括しているほどの主張が感じ取れる。この悲劇的な和音に始まる出だしは、オペラの第2幕のクライマックスで、ドン・ジョヴァンニが地獄に引きずり落とされる場面に使用されている。ドラマチックな脅威を与える復讐の音楽のような出だしから、自分自身が直面する葛藤により中断されるかのように、突如、アレグロのニ長調によるドン・ジョヴァンニの活発でエネルギーに満ちたりたような陽気で華やかな音楽に移る。そして、第2テーマは、属調のイ長調で現れる。展開部は、第2テーマから始まり、両テーマが転調、展開されて、ニ長調の再現部に戻る。決然とした出だしのフォルテで総奏による和音のジェスチャーは、序曲に散りばめられており、作品のコントラストを際立たせ、これから起こるドラマを誘引する。

作曲：1787年
初演：1787年10月29日　プラハ エステート劇場（作曲者本人の指揮）
楽器編成（序曲）：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部

モーツァルト
クラリネット協奏曲イ長調 K.622

モーツァルトの亡くなる数ヶ月前に完成されたクラリネットのための唯一の協奏曲であり、彼の「白鳥の歌」ともなった美しい最後の協奏曲である。協奏曲というと華やかなソリストの技巧を見せつけることを目的とした作品が多いが、この作品は外面的な華やかさよりも内面的な表現力を魅力とする。

モーツァルトの友人で、ウィーン宮廷楽団に仕えていたクラリネット奏者、アントン・シュタードラーの為に作曲された。彼は、当時の優秀な奏者であったが、シャルモー音域として知られる低音域を好んでいたという理由から、第2クラリネットパートを担当していた。低音域を更に加える為に、楽器にチューブやキーを加えたりして、自分の楽器をカスタマイズしていたそうである。バセット・ホルンと同音域で、バセット・クラリネットと呼ばれる楽器を愛用していた。彼の楽器は現存しておらず、現在のバセット・ホルンに類した楽器であろうと推測される。同様にモーツァルトの自筆譜も現存しておらず、ト長調で書かれたバセット・ホルンの為の未完成のスケッチからイ長調に直して補完されたものである。シュタードラーは、優秀なバセット・ホルン奏者でもあったので、両作品とも彼の為に書かれたもので、彼により初演された。

この作品では、ソリストの腕の見せ所となる華やかなカデンツァがない代わりに、1楽章に2カ所、2楽章に1カ所、ドミナント・コードを保持しフェルマータに続く、アインガング（次のフレーズにつながる即興的な導入部分）が3カ所ある。オーケストラでは、オーボエの鋭い響きや金管楽器、ティンパニのドラマチックな盛り上がり、ソロで使用しているクラリネットを避けて、フルート、バスーン、ホルン、弦楽器のみの編成となっており、クラリネットの各音域の個性的な音色を熟知し、オーケストラとソロが密接に呼応しながら構築されている。

第1楽章　アレグロ
第2楽章　アダージョ
第3楽章　ロンド（アレグロ）

作曲：1791年
初演：不明
楽器編成：クラリネット独奏、フルート2、ファゴット2、ホルン2、弦5部

モンカーヨ
ウアパンゴ

メキシコ国民楽派の作曲家によって結成された「メキシコ4人組」の一人として活躍したホセ・パブロ・モンカーヨ（1912-58）の、代表作品のひとつが、《ウアパンゴ》である。「ウアパンゴ」とは、メキシコ東部の湾沿岸地方ベラクルス地方の伝統的な華麗で即興的な民族舞曲で、6/8、3/4拍子を混合したラテン・アメリカ的なリズムをもっている。彼は、ベラクルス地方に直接、調査に赴き、純粋な形で保存されている民謡を収集し、その地方の有名な3つの民謡から着想を得てこの作品を作曲した。ハープ、トランペット、ヴァイオリンを強調し、ソリストとオーケストラによるコールアンドレスポンスや、軽快な打楽器により、リズミカルでカラフルな作品となっている。

作曲：1941年
初演：1941年8月15日（カルロ・チャベスの指揮）
楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、E♭管クラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、バス・ドラム、スネア・ドラム、インディアン、ドラム、クラヴェス、ギロ、マラカス、ソナハス、シロフォン、ハープ、弦5部

マルケス
ダンソン第2番

メキシコ人の作曲家、アルトゥロ・マルケス（1950- ）の代表作品である《ダンソン第2番》は、メキシコ国立自治大学の依頼により作曲され、娘に捧げられている。伝統的なカップルで踊られるサロンダンスである「ダンソン」は、フランス、イギリスのカントリーダンスに起源をもち、19世紀にスペイン人により持ち込まれたキューバのコントラダンサ、ハバネラにまで遡り、ベラクルス地方に現存する。ベラクルスを訪問した際に、アイデアを練る。テンポやアクセントの位置を変えながら特徴的なリズムで、官能的でノスタルジックな世界を創造している。2009年に、ダンソンの最盛期であった1940年代のメキシコ市を舞台にしたショートフィルムが、作曲者も参加して制作されている。

作曲：1994年
初演：1994年メキシコ・シティ（フランシスコ・サヴィンの指揮／メキシコ国立自治大学交響楽団）
楽器編成：フルート2（ピッコロ持替1）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、バス・ドラム、スネア・ドラム、サスペンデッド・シンバル、クラヴェス、ギロ、弦5部

ヒナステラ
バレエ『エスタンシア』組曲 作品8a

アルゼンチン人作曲家、アルベルト・ヒナステラ（1916-83）は、アルゼンチンの大草原であるパンパスのガウチョ（パンパスに住むカウボーイ）の民謡の素材をいかした作品を多数作曲しており、この作品により国際的な名声を得る。アメリカン・バレエ・キャラバンが、南米ツアーの為に委嘱したバレエ音楽であったが、バレエ団が解散してしまい、作曲者により4曲を選んで演奏会用の組曲としたものが、この作品である。1、4曲目は、エネルギッシュな男性のダンスである「マランボ」の6/8と3/4の交互に変わる効果的なビートによる。「マランボ」は、パンパスの男性のみによる原住民の特有なダンスである。歌詞はなく、リズムのみで成り立っており、ガウチョ・ブーツを履いて踊るタップダンスの一種であり、力強さ、激しさを競い合うガウチョたちの戦いであった。エスタンシアとは、スペイン語で農場を意味する。

1. 農夫たち

「マランボ」ダンスから着想を得ており、打楽器、ヴァイオリンの伴奏とともに金管楽器による素早いリズム、駆り立てるようなアクセントによる激しい音型により、逞しい農夫達の男性的な力強さを表現している。

2. 小麦ダンス

弦楽器のピッチカートによる伴奏は、ギターをかき鳴らす音を喚起し、フルートの柔らかい旋律のソロで始まり、ヴァイオリンの叙情的な旋律により朗々と歌われる。

3. 牛飼い

ストラヴィンスキーの『春の祭典』を思わせるような、金管楽器とティンパニによるシンコペーション、不規則なリズム、拍子の変化を含んだ攻撃的なリズムによる華やかなダンス。

4. ファイナル・ダンス（マランボ）

ガウチョたちの競い合う獰猛なダンス、「マランボ」スタイルに戻り、打楽器もカラフルに加わりクライマックスへとスリリングに駆け上る。アンコール作品としても取り上げられる事の多い人気の作品である。

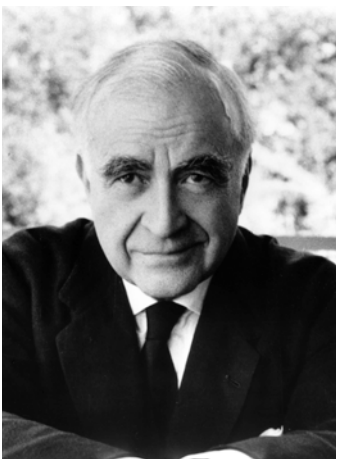
作曲：1941年
初演：［4つの舞曲 作品8a］1943年5月12日 ブエノスアイレス、テアトロ・コロン（フェルッチョ・カルシオの指揮）
［バレエ全曲］1952年8月19日 ブエノスアイレス、テアトロ・コロン
楽器編成：ピッコロ、フルート（ピッコロ持替1）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、バス・ドラム、スネア・ドラム、テナー・ドラム、シンバル、トライアングル、タンブリン、カスタネット、タム・タム、シロフォン、ピアノ、弦5部

伊藤美由紀（作曲家）

『メキシカン・ソウル』

メキシコの伝統的な民俗音楽、土着の文化を調査し、そこから着想を得て自分達の作品に生かしてメキシコ音楽の芸術性を高めた19世紀後半から現在に至るまでの作曲家を中心に、歴史的背景とともに紹介したい。

アルゼンチンのアルベルト・ヒナステラ、ブラジルのヴィラ・ロボスとともに、ラテン・アメリカの後世の音楽家に大きな影響を与えた歴史的に重要な作曲家の一人としてあげられるメキシコ人は、カルロス・チャベス（1899-1978）である。チャベスは、作曲家であるとともに、指揮者、理論家、教育者、ジャーナリスト、オーケストラの音楽監督として活躍した多才な音楽家であった。子供の頃から、家族で、原住民の文化の強い地方で休暇を過ごした経験が、その後の彼の考え方にも影響を与えている。メキシコ革命（1910-20頃）は、彼の創造活動に大きく影響し、メキシコ国民音楽の支持者として、原住民の音楽、文化の調査を進め、新たな可能性を追求する。『国民音楽であればよいのではなく、いい音楽でなければ意味がない』と言及しているように、音楽経験を絶えず展開し、広範な知識を持ち才能のある作曲家により創造されることの意義を説く。チャベスの音楽は、ヤキ族や自国の打楽器を使用した作品、ポリリズム、シンコペーションからなる不規則な拍子による作品が特徴である。当時、メキシコ国民意識、独創性、個性への考え方を追求し活躍していた同時代の音楽以外の著名な芸術家として、メキシコ壁画運動に貢献したディエゴ・リヴェラ、ホセ・クレメンテ・オロスコ、ダヴィッ・アルファロ・シケイロス、そして画家のルフィーノ・タマヨらがあげられる。チャベスは、その頃、ヨーロッパ、ニューヨークも訪問しており、メキシコ国立交響楽団の音楽監督に就任、メキシコ国立音楽院の院長も6年間勤める。音楽監督として、同世代のシルベストレ・レブエルタス（1899-1940）、弟子のホセ・パブロ・モンカーヨのような期待される作曲家への作品委嘱や、画家、建築家、バレエ作品の委嘱も奨励した。



カルロス・チャベス

追記すると、チャベスの前の時代で重要な作曲家では、チャベスの師匠でもあるマニュエル・ポンセ（1882-1948）がいる。歌曲《小さな星（エストレリータ）》が有名で、ギター奏者のアンドレ・セゴビアと親交があり、ギター奏者の間で有名なギター作品が多数ある。

次に、チャベスの弟子であり、彼の意思を継承した次世代の作曲家を紹介する。ロシア５人組、フランス６人組に倣って名付けられた「メキシコ４人組」のメンバーである、1930年代半ばから活動を始めた国民楽派の作曲家、ホセ・パブロ・モンカーヨ（1912-1958）、ブラス・ガリンド（1910-1993）、サルバドール・コントレラス（1910-1982）、ダニエル・アイヤラ・ペレス（1906-1975）である。メキシコ音楽院でチャベスにより開講された作曲コースで、彼に師事する。モンカーヨが特記に値する。メキシコ国立交響楽団の打楽器奏者、ピアニスト、指揮者としても活動した。チャベスが、メキシコ国立交響楽団の為にメキシコ音楽による公演を開催した際に、モンカーヨ、コントレラスにメキシコの伝統的な民俗音楽に基づいた作品を依頼する。前年度のニューヨーク公演の際には、ヘロニモ・バケイロ・フォスターによる《ウアパンゴ》を含んでいたものの、ベラクルス地方のいくつかの人気の民俗舞踊の管弦楽による編曲であった為、新たにモンカーヨにベラクルス地方の民謡から着想を得た満足のいく作品を依頼したのである。チャベスは、モンカーヨとガリンドをベラクルス地方に調査の為に送り、彼らは、土着の音楽の旋律、リズム、楽器を収集した。《ウアパンゴ》は、その結果生まれた、考え抜かれた色彩豊かな管弦楽作品となり、モンカーヨの代表作となる。チャベスとコープランドの推薦により、ロックフェラー財団から奨学金を授与し、今日、アメリカのタングルウッド音楽センターとして知られている音楽講習会にも参加し、コープランドの作曲コースで作品制作も行う。オーケストラの指揮者として１０年間活動していた際は、困難な文化、政治的情勢により阻害させられたものの、モンカーヨの早世とともに、メキシコ革命の理想は消滅し、国民主義は衰退していった。

ところで、メキシコ音楽というと「マリアッチ」を思い浮かべる人も多いだろう。伝統的な刺繍の衣装とソンブレロを身につけて民俗音楽を演奏するヴァイオリン、ギター、トランペットなどの楽団で、2011年にユネスコの無形文化遺産に登録されている。彼らの演奏する音楽は、伝統的な土着音楽で、ウアパンゴ、ソン・ハリシエンス、カンシオン・ランチェラ、コリード、ボレロなどを含む。

メキシコの民俗音楽を演奏する「マリアッチ」

最後に、現役として国際的に活躍する作曲家を紹介する。モンカーヨの《ウアパンゴ》とともに、第２のメキシコ国歌とも言われる《ダンソン第2番》の作曲者であるアルトゥロ・マルケス（1950- ）、ヨーロッパに留学し国民主義を打破した次世代の作曲家たち：メシアン、シュトックハウゼン、リゲィらに師事し、母国でもメキシコ国立大学で作曲家、理論家として後進の指導、コンピュータ・テクノロジーの応用も行うフリオ・エストラーダ（1943- ）、チャベスの弟子であり、パリに留学し、即興グループで活動、エレクトロニック・音楽スタジオで制作の経験もあるマリオ・ラヴィスタ（1943- ）がいる。そして、ラヴィスタの弟子のハビエル・アルバレス（1956- ）、アナ・ララ（1959- ）、ガブリエラ・オルティス（1964- ）らのラテン・アメリカの音楽要素を取り入れつつ、情熱的かつ個性的な作風で国際的な活動を行う作曲家達が続く。

メキシコは、古くはアステカ、マヤ族の文化に遡り、スペイン人による征服時代のスペイン文化との融合、革命時代は、先住民文化の再評価とともに国民主義に根付き、現代に至る。世界遺産も豊富で、歴史的に独特な個性をもった文化が培われ、音楽にも多大な影響を与えている。

神戸異人館通りすぐ傍！ 弦楽器とレコードの店「プリムローズ」

Primrose

元名フィルのヴィオラ奏者が開いた弦楽器専門店

Fine Violins,Violas, Cellos, Bows, Accessories,Records, CD's & Books

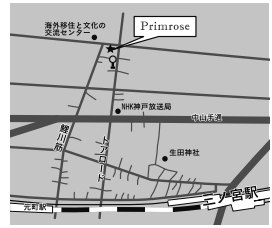
完全予約制ですので、ご来店の際はあらかじめお電話ください

Ｅｍａｉｌ：primrose_ming_14@castle.ocn.ne.jp

ホームページ：http://w-primrose.com/

〒650-0003 神戸市中央区山本通3-16-20

ＴＥＬ：078-221-6497　携帯090-1445－6380（李善銘）



三ノ宮、または元町よりトアロードを北へ徒歩12分
市バス⑦番（三ノ宮そごうデパート前乗車）
山本通3丁目下車徒歩2分
（トアロード山本通3丁目信号西へ30秒）